

# 教職大学院ニュースレター

## 特集：馬場学長にインタビュー!!

待望の『教職大学院ニュースレター』第2号発刊!!  
新企画「情熱大陸」も登場し、内容も盛り沢山!

2

Fall 2015

## 実現!! 馬場学長との懇談

平成27年6月、「教職大学院ニュースレター」編集部代表が学長室を訪問。少し緊張した面持ちの私たちを馬場学長が温かく迎えて下さいました。約30分にわたるインタビュー形式の懇談会では、編集部の質問に問々、丁寧にまたざっくばらんにお答え下さいました。その内容は、「子ども時代の思い出」から「教職大学院への期待」まで多岐に。待望のインタビュー要旨をお楽しみください!

○編集部：どんな子ども時代でしたか？また、印象に残っている先生はいますか？



馬場学長：小学校時代は元気な子で、友だちとぶつかることが多く、よくけんかをしていました。そんな子ども時代、小学校4年生の担任との出会いが印象に残っています。だめなところよりもいいところを見つけてくれる先生、子どもの思いを受けとめてくれる先生でした。先生に元気な自分を受けとめてもらい、問題を起こす頻度が減りました。

また、教科担当の先生では、中学校3年生の時の数学の先生が印象に残っています。平方二乗の和を何度も繰り返し学習し、訓練させられました。でもそのおかげで、中学校の数学の基礎をその先生につけてもらいました。またその先生との出会いが、今、経済の学問を探究していることに少なからず影響しています。

○編集部：今の子どもを現状をどのようにみていますか？

馬場学長：私の子ども時代と比べ、今の子どもを取り巻く環境、社会状況は大きく変化しています。当時は、公園に行けば、誰かが遊んでいて、異年齢で遊ぶ機会も自然にありました。そんな中で、子どもの中で自然と様々な力が育まれていったように思います。また、家庭では一家団欒の時間も多かったですね。それに対して、今の子どもたちはface-to-faceで人とつながる機会が減り、友だちと遊ぶのも約束をするところから…。

○編集部：これからの教員に期待されていることは？

馬場学長：経済格差が広がったり、保護者が学校に要求することが多くなってきたり 等々。子どもをめぐる環境が複雑化する中で、教員自身が大変難しい状況におかれているのではないのでしょうか。とはいえ、教育によって人は初めて人間になります。子どもたちが自分の才能を伸ばす、開花するきっかけとなるのは、教員であることに違いはありません。そのために、まずは自分がめげないこと！どんな状況におかれても、粘り強い精神力を発揮することです。子どもの無限の可能性を信じ抜いていけるか、自分で人生を切り開いていけるか。そして、牧口先生が理想としていた教育を！生涯にわたって行っていくと決



めることですね。一人の教員が、教員生活の中でふれあう児童は千人を超えます。そういった意味でも、教員は子どもにとって影響力のある非常に大事な存在となります。

○編集部：創価大学が「スーパーグローバル大学創成支援」に採択された中で、教職大学院が担うべきことやこれからの方向性についてどのように考えておられるか。

馬場学長：これからの子どもたちは、知識基盤社会、なおかつグローバル化が進む中を生きていきます。転換期にある今、知識の活用や仲間と協同的に問題を解決する資質や能力の育成が求められ、それをカリキュラムに落とし込みどのように展開していくのかが問われているのだらうと思います。個々の子どもが自己実現するために、具体的に自分がどう実践していくか。そのためにも、教師自身が成長し続けることが重要ではないかと考えます。また、今いわれている21世紀型スキルということも、牧口先生の創価教育学と響きあうものがあると思います。そういった意味でも、教職大学院にはやはり理論部分だけでなく、実践を含めて、新たなことを期待しています。

○編集部：今、実際に問題に直面し、困難を乗り越えようとしている卒業生にメッセージをお願いします。

馬場学長：まず、問題には色々な種類があると思います。すぐに解決できるも問題があれば、すぐには解決できない問題もある。その見極めが大事だと思います。しかし、一人では、見極めできない。そんな時、仲間がいると違う考えもあると気づきます。一人でがんばる人はそんなにいないですよ。仲間に話すことにより、問題の仕分けができたり、違う意見がもらえたり、チャレンジしようとする意欲がもてたりする。また、いろんなチャンネルを持つ人は、困難を乗り越えやすいと思います。だから良い友達を持つこと、いろんな人と付き合うことで、ひろく見ていくことができると思います。(最終面に続く)

# 修了生、あの人は今



今回は、3期プロ2出身の富井愛枝さんに取材を行いました（平成27年5月八王子市内某所にて）。富井さんは現在、大阪教育大学付属池田小学校に勤務しています。（注：ちなみに富井さんと取材者（藤永）は、小学5年生からの知り合いです。富井さんが大学院のパンフレットに載っているのを見つけたことをきっかけに、大学院進学を勧められました。）



藤永：富井ちゃん久しぶり！

富井：ほんまに、ひさしぶりやなあ！

藤永：元気そうで何より。前、会ったときは、疲労感が伝わってきたけど…

富井：今でも大変なことに変わりないよ〜。（笑）

藤永：やはり…今日は色々話を聞かせてもらうよ〜！早速ですが、大学院修了後現場に戻って一番大変だったことは何か？

富井：うーん…、私の場合は一般校ではなく、付属の小学校に転勤になったので前任校と子どもの実態が違いすぎて…最初は戸惑ったよ。あと、研究の方針が学校でしっかりと定まっているため、大学院で研究したことがそのままいさせる状況ではなかったかな。今、目の前にいる子どもたちの実態に合わせて、新たな研究が始まったという感じです！体力的にも、精神的にも一年目はほんまに、苦しかったな…。ほんまに、あれは修行やな…。（涙、涙）

藤永：まさに、学び続ける教員としての姿そのものやね。（涙）

藤永：大学院に入って良かった！と今思えることは？

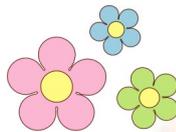
富井：大学院での学びは即効性のあるものではないんやけど、修了して年数を重ねるごとにじわじわっと学んだことが生かされていく感じです。あと、大学院で得た教育に関する知識や情報は最先端のものやったんやなあ！と現場に戻ってから、つくづくそう思いました。

藤永：なるほど！きっと順調なことばかりではなかったからこそ、大学院時代に学んだことが富井ちゃんにとって意味のあることに思えてきたんやろうねえ。ところで、今どんな研究をしているの？

富井：校内研究では道徳の研究をしているよ。うちの学校は、毎年、公開授業研究会があり他校の先生方に授業を参観してもらうんやけど、道徳はほんまに奥が深くて、最初は後の協議会で厳しい意見を多数もらい、何度も何度も心が折れそうになりました…。そんな過酷な状況でも、必死に教材研究をして研究会に臨むうちに、次第と私の授業に関心を持って参観してくれる先生が増えてきて。今年の2月の研究会では、参観者数が校内で二番目に多いという嬉しい結果を出すことができました！

藤永：すごいことやね!! では、最後に、在学生にメッセージをお願いします。

富井：在学生の皆さんへ。大学院時代に学んだことは必ず教育現場で生かされる学びとなります！大学院時代もそうですが、修了してからも夢と希望が広がること間違いなしです。自分自身の、無限の可能性を信じて、子どもの幸福を一番に考えられる教員へとともに成長していきましょう！



ウルフルズの「ハンザイ」を熱唱する富井さん

## 頑張る院生の一日



創価大学教職大学院は、年に12回も「入試説明会」を開催してるよ。お友だちにどんどん紹介してね!! 詳しくは、kyoshoku-d@soka.ac.jp までメールしてね!!



川島紀子さん  
（リーダー8期）  
出身地：東京  
マイブーム：  
妖怪メダルの収集

05:00 起床	息子（4歳）が寝ている間に勉強
06:30 朝食	息子を起こして、朝食と身支度。朝から大忙し。
07:45 出発	息子を保育園に送り届けて、大学へ。急がなきゃ!!
09:00 授業	1J「道徳」2J「人間教育実践分析研究」
12:15 昼食	仲間とラウンジでお弁当を食べながら歓談をしています。
13:00 自習	翌日のタスク作成のために、自習室で勉強しています。
14:50 授業	4J「学級のデザインと子ども同士の関係づくり」5J「教職課題研究」
18:20 大学発	授業が終わったらすぐに保育園へ向かいます！いそげ〜!!
19:00 保育園	ギリギリお迎え完了!! 息子と今日あったことを話しながら帰ります。
19:30	夕食・お風呂が終わったら、息子との時間を楽しみます。読み聞かせをして、息子がやっとな寝。
22:30 自由	やっとな自分の時間が到来!! 授業のタスクに追われる毎日…
24:00 就寝	今日も一日がんばった〜! 明日もがんばるぞ〜!!



細田英輝さん  
（プロ3・8期）  
出身地：東京  
マイブーム：  
世界の国のラジオを聞くこと

05:00 起床	江東区に住んでいるので、朝は早いです! 今日一日頑張るぞ!
06:00 朝食	朝が早いので朝ごはんはちゃんと食べます! その前に身だしなみもしっかりと!
06:30 出発	今日も八王子の大学まで小旅行! 新宿から大学直通のシャトルバス助かります!
08:30 大学着	ようやく大学に到着! 授業開始までの30分でも、大事な勉強時間です!
09:00 授業開始	今日は1限から5限までのフルコマ! まあ慣れるもんですね。学び抜きます!
18:05 授業終了	やっと授業が終わりました! 仲間と学ぶ環境があるからこそ、フルコマ乗り切れます!
18:30 バス	今日は課題がないので早めに帰宅! 時間に余裕があれば新宿で買い物しますね!
21:00 帰宅	家に帰りご飯を食べて、風呂に入り、ようやく一息。音楽を聴いたり、ラジオを聴いてリラックスしています。今日も疲れたな〜。
24:00 就寝	朝が早いので24時には寝るようにしています! 予習・復習も済んでから寝ます!

# 大陸熱情

栃木県小山市。八王子まで121キロ。なんとそこから、わが創価大学教職大学院まで毎日通って来ている現職教員の院生がいるという。一体どんな人物なのか。取材班が一日密着取材に走った。本間忠明、37歳。長身で、一見寡黙そう。しかし、話してみると朴訥な口調のなかにも、明るい笑顔が印象的だ。東京都台東区の小学校に勤務して7年。その前には新潟県で講師を経験している。バレーボールが得意で、先日の東京都教職員バレーボール大会では見事チームを準優勝に導いた。取材当日、6月24日。本間の朝は早い。起床5時。6時には家を出て、JR小山駅に向かう。新幹線に乗り、大宮駅まで20分。更にそこから大学院までは約2時間かかる。「長い通勤時間は主に読書をして過ごしています。」そう言って取り出した本は、『21世紀型スキル』『ディープ・アクティブ・ラーニング』『変わる学力、かえる授業』。



侮れない。院での課題以外の本も着々と読み進めているのだ。この日の授業は3時間。全てに予習・復習の課題が課せられている。これは、今話題の協同学習への取り組みからきている。本間の勤務校はこの協同学習の研究指定校でもある。本間は大学院で自ら協同学習を体験し、小学校現場に還元しているのだ。3時限の「教育実践研究方法I」の授業では、講義に続きグループディスカッションを行った。本間は司会を務める。参加者から出る意見を、手際よくまとめていく。この日の討議は白熱し、ときに大爆笑のなか授業が進められた。17時すぎ。4時限の授業が終わるとすぐに帰路につく。急いで帰っても帰宅すると20時を過ぎるという。「家に帰ってですか？4歳と1歳になった息子たちと遊ぶ時間が楽しみですね。上の子は今、戦隊ものに夢中でね」と笑顔がこぼれる。家庭での育メンぶりがじんわりと伝わってきて記者の心も温かくなった。誠実。本間の大切にしている言葉だ。「誠実に対応する。そこから子どもや保護者、すべての人との関係が築けてきたと思っています」こちらの質問に対し、真正面から答えるその人柄からも彼が誠実であることは明白だ。「おつかれさます！」そう言って笑顔で手を振ると、本間は帰りの新幹線に乗り込んだ。



越智晃さん  
(プロ3・6期)  
出身地：茨城  
マイブーム：  
中華料理のレ  
パートリーを増  
やすこと

06:30 起床	朝から、お昼のお弁当をつくっています。
07:00 朝食	朝は納豆。冷蔵庫に30パック常備しています。
08:00 学校ボランティア	子どもたちと直接かかわることができ、学びの連続です。大学院での学びも深まります。
13:00 授業	国語の教材を開発、研究する授業において、自分たちの意見をぶつけたら、追究していくことで、実践に繋がるものを増やしていったことが生きています。
16:30 自習	今日の授業の復習をしています。振り返ることで、新たな気づきが生まれることもあり、大切な時間です。
20:00 家庭教師	一人のために、徹して寄り添う。授業だけでなく、心の支えにもなるように気を配っています。
22:00 帰宅	創価大学内の寮に帰宅します。学業に徹することのできる環境に感謝しています。
23:00 自由	好きな本を読んだり、ゆっくりすごして、リフレッシュをしています。よし、明日もがんばるぞ!!
24:00 就寝	おやすみなさい。ZZZ...



ちょっと一息コラム

学び続ける教師のための「一冊」

ブラジルの教育者・哲学者であるパウロ・フレイレ著『被抑圧者の教育学』は1968年にポルトガル語版が出版された。フレイレは、教師による学習者への知識の一方的な付与の形態を「銀行型教育」として批判し、例えば、次のような指標を列挙してそれを説明した。「(銀行型教育の)教師は、知識の権威を自分の職業上の権威と混同し、その混同した権威によって、生徒の自由を圧迫する」、「教師が学習課程の主体であり、生徒は単なる客体である(と考える)」、「教師が行動し、生徒は教師の行動を通して行動したという幻想を抱く」、「教師が語り、生徒はそれを(だまって)聞く」、「教師が考え、生徒は考えられる対象である」等である。これらの指標は、「学習者中心の教育」を再考する上での重要な示唆を含んでおり、教師に「(無意識的に)内面化された抑圧傾向」への批判的な気づきを促している。



(一面からの続き)

○編集部：教職大学院の開学当時、期待されていたことを教えてください。

馬場学長：それは、先ほどいったことにつながります。それは、創価教育学の現代的展開です。教職大学院生が教育を実践する中で、世界に「創価教育というのは素晴らしい！」と示していく、それを知った世界の人々が創価教育を理解する。そのようなことを期待します。牧口先生が創価教育学体系を残し、池田先生が幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学を創立しました。そこで学んだことを教育の現場で、自信を持って実践していただけることを期待しています。



最後に記念撮影を

**教職大学院・教育学部合同フォーラム「新たな学びを創造する学び続ける教員」を盛大に開催!!**



教職大学院生同士のコミュニティーづくり

教職大学院には、「学びの場」「出会いの場」がいっぱい。



# 教師力UP講座を開講!

なかやんこと中山隆史さんが語る講座の背景：教職大学院生同士が互いに学び合い、かかわり合いを深められる人間交流の場をつくりたいとの思いから連続講座の企画を計画しました。これまでの講座では、リーダーの先生方が現場で培ってきた実践や技を伝授していただくことができました。今後は、ストレートマスターのメンバーがもつさまざまな特技や技を教えてくださいたいと思っています！

## 2015年度前期に開講した講座内容

- 第1回：ぬまっちの作文講座
- 第2回：なかやんの学級経営講座
- 第3回：ちこちゃんの楽しい算数的活動講座
- 第4回：ほんまくんの体育指導講座
- 第5回：のりぴーの教材（理科）作り講座
- 第6回：のぶさんの体づくり運動講座
- 第7回：大樹さんの国語授業講座
- 第8回：きみ姉の総合的な学習講座
- 第9回：たかさんの通知表の所見作成講座
- 第10回：ちゃんくぼさんのキャリア教育講座
- 第11回：なみきさんの人権教育講座



ポスター



参加者の声：

「教材づくりの視点から、教員として一番大事なところを学びました。教材づくりと一言では表現できない「愛」がありました。」「熱」がありました。最高でした！」（8期リーダー）

「今回の講座では教師の「楽しい！」が100%伝わってきました。教師自身が楽しんでいるからこそ子どもも楽しく学べるということを実感し、私も常に子どもたちがどんなことをしたら喜ぶだろうと想像しながら教材研究に励んでいきたいです。」（8期プロ3）

「学ぶきっかけになりました！自主的に集まって学び合うって、こんなに学びが深いんだなと思いました。教師のカラーが全てとも思えました。教師の人間性こそ全てだなと思いました。」（7期プロ3）



「模擬授業形式でとても楽しかったです。子どもの気持ちになって参加することができました。」（7期プロ2）

創価大学教職大学院の授業での学びを元に、院生同士の学び合い、高め合いを通じた日本一の連帯を築いていきます!!

創価大学教職大学院・教育学部の合同フォーラムが、平成27年9月12日（日）に、本学中央教育棟にて開催され、全国各地から小・中・高等学校の現職教員、大学教員、大学院生、学部生、教育関係者ら約150名が参加しました。このフォーラムは、「新たな学びを創造する学び続ける教員」とのテーマで、午前中にラウンドテーブル、午後にはフォーラムの2部形式で行われました。新たな試みとなった午前のラウンドテーブルでは、「特別支援教育」「社会科教育」「国語教育」「協同学習」の4つの分科会に分かれて、本学の教職大学院で学んだ現職教員による事例報告やワークショップが行われました。参加者からは「教員養成について、様々な観点から学び直すことができた。特に教職大学院の重要性について改めて知ることができた。」「これからの教育界の目指すべき方向性が見えました。」などの声が寄せられた。（創価大学HPより一部抜粋）

教職大学院ニュースレター  
第2号編集部

【編集長】

藤永喜美子（ねえさん）

【編集部】

川島紀子（のりぴー）

木村知子（ちこ）

賀田純江（すーちゃん）

中山隆史（なかやん）

高橋大地（部長）

**あなたもニュースレター作りに参加しませんか？**

**編集部員・記事投稿者募集!!**

編集部員の明年度の大量卒業につき、またもや編集部員不足。編集や校正に興味のある方（現役生）、或は記事を投稿したい方（修了生含む）は、編集部までご連絡を。



待望のニュースレター第2号を発行することができ、まずは取材に協力して下さった皆様、心よりお礼を申し上げます。大変に有難うございました。第2号を最後まで読んで頂き、第1号よりも確実にPower UPしたことを感じて頂けたなら編集部一同、感無量です！「修了生、現役生、そして未来の教職大学院生をつなぐニュースレター」として、これからも学生主体で創り上げていくことを念願しています。第1号、2号と携わらせて頂き、有難うございました！（編集長）